

## 百済王敬福と東大寺盧舎那仏開眼供養

桓武天皇の母である高野新笠（父は和 乙継）は百済武寧王の系統をひく和氏の出身であるが、百済王氏は武寧王の系統とは異なる百済滅亡の時の義慈王の子孫である。

義慈王の子であった豊璋・善光（禪広）は、百済滅亡時にはすでに日本に渡来していた。兄の豊璋は百済復興のために帰国（662年5月）したが、敗北して高句麗に逃走したとされている。弟の善光は日本にとどまって百済王と称したのである。

「日本書紀」天智天皇称制3年3月条に「百済王善光王らを以て難波に居べらしむ」とあり、難波を本拠として百済郡が設置されたりした。善光の子が昌成で、昌成の子が郎虞、郎虞の子が百済王敬福（政界で活躍）である。

「続日本紀」天平神護2年（766）6月28日条に百済王敬福の薨伝が記載されている。薨伝によれば、百済王氏の名は持統朝に賜与され、百済王郎虞は従四位下摂津亮になったと述べられている。百済王敬福は郎虞の三男で放縱にして拘わらず。頗る酒色を好む。聖武天皇の寵遇をえて政治の糧あり。天平年中に従五位上陸奥守に至る。百済王敬福が陸奥守になったのは天平15年（743）6月で、上総守を経て天平18年（746）再び陸奥守に就任した。時に聖武天皇、盧舎那の銅像を造りたまふ。鍍金足らず。天平21年（749）4月22日、陸奥国より驛を馳せて小田郡より出だせる所の黄金9百両を貢す。我国家の黄金これより始めて出つ。聖武天皇は甚だお喜びになり7階位をとびこえて従三位をお授けになった。天平勝宝2年（750）5月、宮内卿に任じられるとともに河内守を兼任することになる。天平勝宝4年（752）5月には常陸守となり、左大弁にのぼり、天平宝字7年（763）正月には讃岐守と歴任した。天平神護元年（765）2月のころ刑部卿となり、天平神護2年（766）6月28日、刑部卿従三位を最後に年69をもって薨じたとある。

天平17年（745）正月21日	僧行基を大僧正とする
8月23日	大養徳国の国分寺金光明寺の寺域に大仏の造立をはじめ
天平19年（747）9月29日	東大寺大仏の鑄造を始める
天平勝宝元年（749）2月2日	行基没
2月22日	陸奥國小田郡より国内で初めて産金 陸奥守百済王敬福、これを献上する

陸奥國小田郡は、現在の宮城県遠田郡の東部。「和名抄」によれば、小田・牛甘・石毛・賀美・余戸の5郷あり、この中の小田郡は現涌谷町の地で同町黄金迫黄金沢の黄金宮は「延喜式神名式」の黄金山神社に当たると言われる。このとき金を獲た人朱牟須売、金を冶する人戸浄山（百済人）がいずれも渡来人であること、黄金迫の地が朝鮮半島の砂金山地によく似た地層をもっていることが指摘されている。

4月1日 天皇東大寺に行幸。盧舎那仏を礼拝し陸奥の黄金を奉る

4月14日	天平感宝に改元
4月22日	陸奥守、黄金900両を貢上する
5月12日	大伴家持、越中にて詠む（万葉集18-4097） 「天皇の 御代栄えむと 東なる みちのく山に 黄金花咲く」
5月27日	陸奥国の調庸を3年間免じ、小田郡は永く免じる
7月2日	天平勝宝に再び改元
10月24日	東大寺大仏本体の鑄造を終わる
12月	大仏の螺髪（わか）の鑄造をはじめる
天平勝宝3年（751）4月23日	天竺僧菩提僊那を僧正、良弁を少僧都、道璿・隆尊を律師とする
6月	大仏の螺髪966個の鑄造を終わる
10月23日	聖武太上天皇病、新薬師寺に49僧を請じ続命の法によって設齋する
天平勝宝4年（752）2月18日	陸奥国多賀以北の諸郡の調庸を黄金とする
2月21日	京畿諸国の鉄工・銅工・金作・甲作・弓削・矢作・梓削・鞍作・鞆張などの雑戸を本貫に下し、旧によって使役させる
4月9日	盧舎那仏の開眼供養、孝謙天皇行幸、五節・久米・楯伏・踏歌・袍袴などの歌舞あり この夕、天皇、藤原仲麻呂の田村第に入り御在所とする

「続日本紀」は、「盧舎那大仏像成りて始めて開眼す。この日、東大寺に行幸し、天皇親ら文武百官を率いて設齋大会（おがみ）す。その儀一に元日に同じ。五位已上は礼服を着し、六位已下は当色なり。僧一万を請ず。既にして雅楽寮及び諸寺の種々の音楽並びに咸く来たり集まる。復た王臣諸氏の五節・久米舞・楯伏・踏歌・袍袴の歌舞あり。東西より声を発し、庭を分かちて奏す。作（な）すところの奇偉勝（あげ）て記すべからず、仏法東帰より齋会の儀未だ嘗て此の如く盛なるはあらず」と見える。因みに「東大寺要録」所引の「大仏殿碑文」によれば「天平勝宝4年歳次壬辰3月14日を以ちて始めて金を塗り奉る。未だおえざるの間、同年4月9日を以ちて大会を儲けて開眼し奉るなり」とあり、開眼当日、鍍金を終えていなかったことがわかる。なお、「続日本紀」は当日孝謙天皇の行幸のみを記すが、「東大寺要録」によれば、聖武太上天皇・光明皇太后も隣席したことがわかる。

なお、孝謙天皇はこの日夕御所に戻らずに従母兄大納言藤原仲麻呂の邸に泊まった。橘諸兄政権から藤原仲麻呂（恵美押勝）政権への重大な転換期でもあったのである。